佛教研究　第四卷　第二號

大谷大學公開講演　開會辭

佐々木月樵

本學は今を距ること凡そ二百數十年前卽ち寬文年中本願寺第十四代琢如法主の創建する所であります。當時の國制にては漫りに學舍を興すことが出來ぬので、その昔、常に海外文化の輸入口となつた筑前大宰府、その大宰府にあつた所の觀世音寺の學寮の規模を京都東本願寺枳殼邸の內に移したが正さしく本學の濫觴です。

その後、場所はあちらこちら移轉しました。明治年間(三十四年九月—四十四年九月)には遠く東京府下にあつたこともあります。要するに德川時代中は、いはゆる修道院的のものでありました。丁度巴里のソロモン大學がその裏にある處のサンゼネヴ井ヴ寺からして發達分化した如くに、本學もまたそれまでは專ら佛敎の神學のみを研究して居た處の修道院的學場でありましたが、維新の際、智識を世界に求むるの國是は、我國の敎育界には明治四年岩倉公の歐米視察となり五年七月遂に國家は大中小の敎育制度を制定しました。從つて我本願寺にても智識を外に求めねばならぬ必要を痛感し、先づそれが闡彰院師の護法場となつて出現し、遂に智識を世界に求むべく

此頃おかくれになつた前法主台下には、當時新門主として、その翌々月卽ち五年九月十三日御洋行遊ばされました。げに此年は記念すべき年であつて五年三月二十日には、眞宗の公稱を許され、本願寺は、その翌月二十七日初めて學制を制定して世間と同じく學校組織の學校が出來たのでした。卽ち、本學はその名を貫練場と改め、外に佛國の師範學校等の制を模して大中小教授を立て、また別に秀才教育機關としては、育英教校等を設置するに至つたのです。更にまた本山內には、前法主台下自から局長となつて、翻譯局までおいて大々的に智識を世界に求めることゝなつたのであります。げに本學は、その時新らしく單なる修道の道場ではなく、一方には佛教の學的の研究所であることの精神を宿したことであります。げに、この精神は、初めて前法主台下の洋行によつて本學、否な、本願寺が自覺した精神かと存する次第であります。

明治六年一月三十日、故光瑩上人には巴里にて御書を認め、之を本山役員及び門末に御送附になつてゐる。その一節をよんでみます。

佛教東漸して既に二千有餘歲、世態の變遷によつて隆替の象いろ〳〵なれども、外護の知識により、世々の先德遺法を傳ふることを得たり。

去年、故伏見一品王、宗教を問はせたまひ、稱讚ありて予にいろ〳〵弘教をすゝめ、旁々教法歷覩のことを誘ひたまふ折から、其筋へ伺ひたりしに、幸に我法愛護の恩庇を得て、壬申九月繼華の夕、滄溟萬里の行をはじめ印度の一隅を尋ねて親しく釋尊の遺教を歷拜するの餘り、數多の貝葉を乞ひ、猶今日に存する經卷陀羅尼を集むることを得たり。

然るに諸經所贊多在彌陀の言空しからず。いよ〳〵祖師聖人の卓見凡夫往生の要路佛法世法ここごとく我一宗に蘊存すること疑なし。

依つて、自今、外は大に印度の學を記し、直ちに經卷陀羅尼を明らめ、內は宗教の宇內に比類なきことを明にし、以て國家風化の萬一を稗益せんことを冀ふ」云々

前法主の御洋行と此御精神とによつて明治六年八月一派の上に孕まれた處のその精神は、明治二十九年度の再度の學制改正となり、今また新らしく我本願寺は學制を改正して以て、その精神を事實の上に求めつゝあるの時であります。かゝる時、遠く東洋學殊に佛國佛教學の大家シルバン、レビ井ー博士には、先きに印度を尋ねて同じく種々の梵本を發見し、茲に前住上人の御葬式にまで參列し下され、重ねて本學の爲めに今日唯今より一場の講演をなして下さることは、我々一同本學の過去に省み、また將來を思ふて因緣の少なからざる事を感ずる次第であります。

昨春、巴里にては、私は博士の教授して居らるゝ所のユレーチ、ドフレスにも參りました。またソロモン大學では總長アベレー博士の御招きによつて、我々一行は一夜學生諸君の全體とも相あふたことの記憶を回想すると、今日なほ愉快に感じます、その時、私はいろ〳〵な方にあひましたが、私は唯我最も畏敬する所のレビウ井博士には印度漫遊の爲めに御留守ときゝ、唯博士にあふことの出來ざりしことを最も遺憾に存じた次第でした、ところが、佛國まで參り乍ら、またその大學を尋ね乍ら遇ふことの出來なかつた博士を、今日、先きに申した樣な因緣ある我大學の學賓として皆さんと御一所に博士を迎へ、これよりまたその御講演をきくことは、佛教の所謂因緣の深きこ

こを感じ、まことに愉快に堪えぬ次第であります。

題は、ニポール佛教の過去及現在といふのです。博士はニポールには今度は滿四ケ月滯在であつたときゝました。その人民は、よく日本人に似る所があるこのことです。一寸開會の御挨拶までに。